

海外バレエ団の衣裳大研究!

構成・文：藤井由乃
イラスト：真蛸ちさ

憧れのダンサーの華麗な舞いを彩る、美しい衣裳たち。海外のダンサーの衣裳は、私たちが発表会などで接するものとはどこか違って見えます。とにかくすてき! でもなぜすてきなのでしょうか? そんな素朴な疑問をひもといていきましょう。

衣裳の個性——お国柄を反映

ポリシヨイ・バレエ、マリインスキー劇場バレエ、ロイヤル・バレエ、パリ・オペラ座……。それぞれのバレエ団には、歴史と文化によって培われた独特の個性があります。それはダンスのスタイルだけでなく、バレエの衣裳にも色濃く息づいています。ここでは、『ドン・キホーテ』第3幕、キトリの衣裳で、ロシア、ロイヤル、オペラ座を比べ、個々の衣裳の「すてき」を探してみましょう。

衣裳のスタイル

ロシア系バレエ団の特徴は、踊りやすさ、機能性に重点を置いているところです。ボディには軽いストレッチの生地を使っていて、衣裳が動きを妨げることがありません。ニーナ・アナニアヴィリの衣裳のボディはペロアですが、他にもライクラというストレッチのきいた生地



ロシア系のキトリ

や、もつと薄いレオタードのような生地の場合もあります。たとえば、マリインスキーの『眠れる森の美女』の妖精たちの衣裳は、筋肉の動きが見えるほど薄く、身体にフィットしています。また、美しい脚さばき見せるため、スカートは短く、ピンと立っています。美しいプロポーションと高いテクニックを誇るロシアならではです。

一方、ヨーロッパ系バレエ団の特徴は、女性らしい美しさの表現。身体のラインをきれいに見せるため、ボディにはボーン (bone) と呼ばれる細いワイヤーが入っています。そして、スカートは、ロシアとは対照的にふわりと垂れ下がっています。まるでコルセットとドレスです。ヨーロッパでは、ドレス文化を背景に、バレエの衣裳もひとつのドレスだと捉えられているのでしよう。

色遣い

ニーナの衣裳は赤と黒。はっきりした色を使い、シンプルにして歯切れの良い美しさを表現するのが、ロシアの衣裳です。『ドン・キホーテ』を初演したブテイバは、バレエを見せる芸術として高めた人物。彼の手法は、ストーリー

ー」という糸に、キラキラ輝く「ダンス」の宝石を通してネックレスを創りあげるといったものでした。つまり主役はダンス。『ドン・キホーテ』の主題は若いスペインの若者の恋ですが、本場の主題は、スペイン情緒のある小粋なダンスなのです。このことから、ブテイバの伝統を守るロシアでは、いかにもスペインらしい真紅の衣裳が好まれるのかもしれませんが。

朝時代の保守的モラルのため、女性の脚を見せるバレエは政府の保護を受けていませんでした。そのような保守的な気風が、荘厳で気品の



パリ・オペラ座のキトリ

あるロイヤル・スタイルを作っているのです。

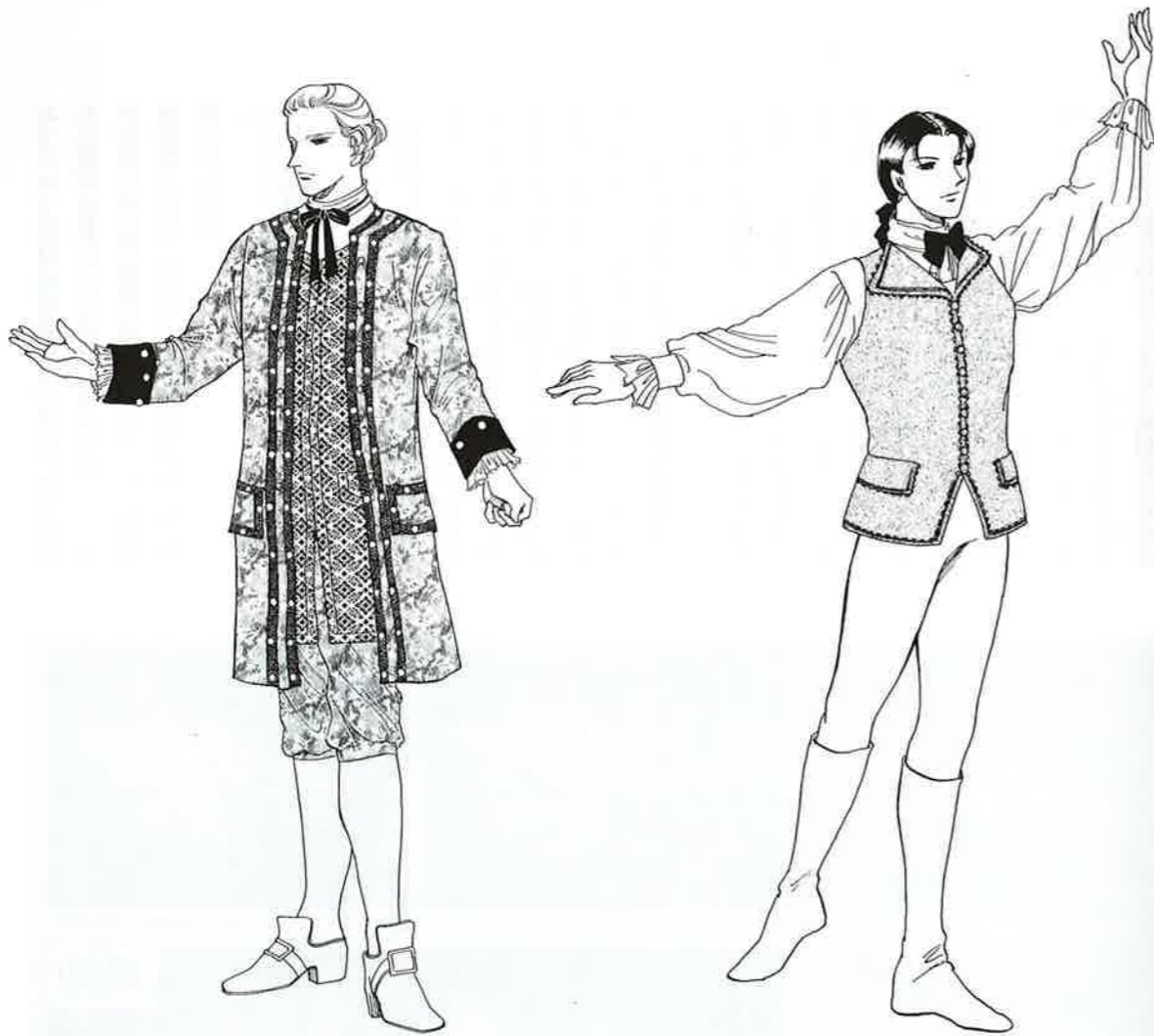
オペラ座 (ヌレエフ版) の衣裳は、明るいベージュに黒・茶色・金のブレードが大胆に走り、そこにたくさんのピンクのリボンが飾られています。パステルカラーはオペラ座の得意色。シャープなデザインに、かわいらしさ、甘さを上手に加えるのがパリのおしゃれ心なのでしよう。

デコレーション

ニーナの衣裳の胸元とスカートには、繊細な金の刺繍が施されています。ロシアは刺繍の技術がとても高く、衣裳部には刺繍専門のスタッフがいるほどです。刺繍の他、金や銀のはっきりした形のモチーフを大胆に飾るのもロシア的



ロイヤル・バレエのキトリ



英国ロイヤル・バレエ版『マノン』より
ムッシュG.M.

さらに、ロココ時代をよく表しているのが、『マノン』に登場するムッシュG.M.の衣裳です。鮮やかな色彩、美しい刺繍、豪華なレース、おしゃれポイントだったボタンなどが、ロココの粋な男たちを仕上げる必須アイテムでした。

宮廷バレエ作曲家リュリ、他方では18世紀のオペラ作曲家ラモーに曲想を求めました。そのため、1幕は17世紀、100年の眠りから覚めた2、3幕は18世紀に設定されているようです。1幕、国王の髪型はカールのかかった長いかつら、服装は、白いタイツにヒールの靴、紋章の入った分厚いガウンです。これはルイ14世の肖像画にそっくりです。そして、4人の王子の衣裳は、17世紀前半に流行した騎士風スタイルです。特徴は、大きなえり、付け髭、長く垂らされた髪に羽根飾りつきの派手な帽子、飾り刀、そして長靴です。童話「長靴をはいた猫」からもわかるように、当時長靴は騎士の身分を象徴するものでした。

これに対して、2幕から登場するデジレ王子の服装は18世紀的です。髪を後ろにまとめて黒い袋に入れ、うなじで閉じる髪型は18世紀から19世紀に流行したものですし、首に巻かれた黒いリボン、美しい金の装飾の衣裳はロココ風です。また、オペラ座の3幕のように、髪の色を白くするのも18世紀の流行のひとつです。バレエの華やかな印象とはうらはらに、年齢や汚れをこまかすための、少々不潔なものでした。

マリインスキー版『眠れる森の美女』
第3幕よりデジレ王子



マリインスキー版『眠れる森の美女』
第1幕より国王

チャイコフスキーは、『眠れる森の美女』を作曲する際、一方では17世紀、ルイ14世時代の宮廷バレエ作曲家リュリ、他方では18世紀のオペラ作曲家ラモーに曲想を求めました。そのため、1幕は17世紀、100年の眠りから覚めた2、3幕は18世紀に設定されているようです。1幕、国王の髪型はカールのかかった長いかつら、服装は、白いタイツにヒールの靴、紋章の入った分厚いガウンです。これはルイ14世の肖像画にそっくりです。そして、4人の王子の衣裳は、17世紀前半に流行した騎士風スタイルです。特徴は、大きなえり、付け髭、長く垂らされた髪に羽根飾りつきの派手な帽子、飾り刀、そして長靴です。童話「長靴をはいた猫」からもわかるように、当時長靴は騎士の身分を象徴するものでした。

ロシアやヨーロッパのバレエを観に行くと、その舞台装置と衣裳が織り成す別世界に、まず圧倒されてしまいます。海外のバレエ団では、衣裳デザイナーが舞台装置デザイナーを兼任することが多く、また、兼任ではない場合にも、入念な話し合いによって作品創りは進んでいき

ます。振付、衣裳、舞台装置が融合しているからこそ、あのような統一感のある別世界が創り出せるのでしょう。



マリインスキー版『眠れる森の美女』
第1幕より4人の王子

といえます。キトリは娘なので宝石の装飾がありませんが、ロイヤルのおとぎ話の姫の衣裳は、装飾がとても豪華で、照明による光り方が上品で幻想的です。舞台装置や照明の効果が計算し尽くされているためでしょう。控えめで端正なダンス・スタイルに合った、ノールな味わいのデコレーションといえます。オペラ座では、キトリのリボンの他、オーロラ姫の衣裳にふわっと咲く小花のように、かわいらしいアイテムが特徴的です。

衣装へのとりくみ 念入りな時代考証

ロシアやヨーロッパのバレエを観に行くと、その舞台装置と衣裳が織り成す別世界に、まず